

## 九曜文庫本『源氏物語抄』と 『水原抄』『千鳥抄』『珊瑚秘抄』

早稲田大学大学院博士課程 タリン カラーヌワット Tarin CLANUWAT

江戸初期の書写と目される九曜文庫本『源氏物語抄』（全十冊、現在は早稲田大学中央図書館蔵）は、中野幸一氏によりはじめて紹介されたが、翻刻されているのは「桐壺」巻のみであり、その内実は充分にとらえられていない段階にある。

本書の第一冊の四丁裏には、「○一葉抄○弄花抄○千鳥○河海抄○花鳥余情○水源等之諸抄を引合註所也・漢語・和語等・并證哥・引哥手仁葉之誤・任知過必改之言・後見之人恥啜言耳」という説明がある。ここから、本書が『細流抄』以前の重要な注釈書を参看・引用していることがわかった。

本書の編者は散佚している『水原抄』の名前も挙げている。それは本当に『水原抄』を参照したことを意味しているのだろうか。試みに『水原抄』の一部の可能性が言われてきた、源氏古注「七海本」と「吉田本」の「葵」巻の内容と比較してみると、本書の「葵」巻と一致する内容はわずかに一項、しかも、内容にも特別な点ではないので、本書と「七海本」と「吉田本」の「葵」巻との関係は非常に薄いと判断した。

ところが、本書の「帚木」巻の「いたくつなひきて」の項においては、四辻善成の講釈を平井相助がまとめた『千鳥抄』とほぼ同じ注記（『妬記』からの引用）が示された後に、「河内守の末抄にみえたり」と記してある。この『妬記』からの引用は、そもそも『千鳥抄』『珊瑚秘抄』と本書にしかみえない。『珊瑚秘抄』の著者、善成は『河海抄』の同じ項において「秘説あり」と記している。一方、本書のように「河内守」の説であることに言及しているものは

いっさい見当たらない。

このように、九曜文庫本『源氏物語抄』から『水原抄』を直接参照した可能性を考えることは今のところ困難であるが、『千鳥抄』『珊瑚秘抄』といった善成関係の注釈書との関わりから、本書に取り込まれた河内守の説について、あるいは『水原抄』について検討すべき課題を見いだしてゆくことができるだろう。

## 『狭衣物語』における身分意識

—『源氏物語』との類似性と相違点、海外の研究での評価—

名古屋大学大学院博士課程 ミッシェル マイヤズ  
Michelle MYERS

「再生の文学」として、『狭衣物語』を取り上げる。以下の点から論じたいと思う。

『源氏物語』の再生としての『狭衣物語』のテーマ、表現、登場人物などについて考える。『源氏物語』は平安時代の社会で大好評であったが、読んで楽しむだけでなく、次世代は『源氏物語』を復元するために、新たな物語を作り続けた。本発表では『狭衣物語』の身分を示す表現に着目する。『源氏物語』に頻出する「身のほど」「数ならぬ」の表現などは他の後期物語よりも『狭衣物語』に多く現れる。『狭衣物語』の身分を示す表現は『源氏物語』の単なる繰り返し過ぎないのか、それとも独自性を持つのか。本発表は『狭衣物語』と『源氏物語』の身分意識の類似性と相違点について検討したいと思う。

海外での『狭衣物語』研究は、近年大いなる進展を見せている。かつては、『狭衣物語』は「『源氏物語』の影響を強く受けている」、「独創性に欠けている」という否定的な意見もあった。しかし、2006年にデイヴィッド・ダッチャー氏が『狭衣物語』の全訳をハーバード大学の博士課程学位論文として提出した。また、2007年にはハルオ・シラネ氏が編集した『*Traditional Japanese Literature: An Anthology, Beginnings to 1600*』に『狭衣物語』の抄訳が収録された。さらに、同年にデエチェベリー・チャロ著『*Love After the Tale of Genji*』に『狭衣物語』の評論が収められた。この三著書からは海外での『狭衣物語』研究の活発化が感じられる。デエチェベリー氏の評論では、貴族の男性と中の品の女性との恋愛について、『狭衣物語』における飛鳥井物語では恋

愛の失敗の原因は恋人間の身分差であることを指摘している。本発表はその指摘について、『源氏物語』と『狭衣物語』の言葉遣いから考察したいと思う。冒頭で述べたように、最近の海外研究を踏まえながら、主に身分意識に関する表現を通して、「再生の文学」としての『狭衣物語』を論じたいと思う。

# 中世文学の模倣やパロディの多面性

—『とはずがたり』における『源氏物語』 摂取をめぐる—

法政大学大学院研究生 ライサ カタリーナ ポッラス マー  
Raisa Katariina PORRASMAA

本発表では、模倣とパロディの関係の多面性を論じる。

リンダ・ハッチオンはパロディを「批評的な距離をもった反復」と定義する。パロディとは、素材となっている作品に対する「笑い」を含んだものだけでなく、アイロニーを特徴とする模倣も含まれると述べている。この理論はパロディの範囲を広げ、その多様さを指摘した点で意義がある。

この考えにもとづけば、日本中古・中世文学においても、新たなパロディ研究も可能なのではなかろうか。そこで本発表では『とはずがたり』をとりあげ、この作品における模倣や引用の中におけるパロディの要素について考察する。特に、アイロニーを含んだ模倣を示す「記号 (サイン)」として、語り手と主人公の間の距離、読者の前提を裏切ること、その前提を空疎化にすること、に注目する。

『とはずがたり』では、前半の宮廷編において、語り手と主人公の間に距離が置かれている。巻一の冒頭で語り手は、若い主人公を『源氏物語』の若紫に重ねている。しかし、物語が進展するにつれ、光源氏と紫の上の物語は、二条と後深草院の人間臭い関係と食い違いをみせるようになる。ここでは模倣や引用により、『源氏物語』の理想的な世界と、主人公が生きている当時の宮廷社会の二つのリアリティが共存している。作者が目指したのは、『源氏物語』などの先行文学を巧みに引用して王朝文学として必要な枠組を構築することとともに、『源氏物語』的な世界に憧れる当時の貴族を皮肉的に見つめることであつたのではないか。

また、巻二の「女楽」の場面では、『源氏物語』を真似たフレームが作られながら、主人公二条はその場面を逃げて出し、場面設定は崩壊してしまう。その結果、『源氏物語』の世界と当時の現実との落差を際立たせ、先行物語に憧れる貴族社会に批評的な視線を向けている。このような観点から、日本古典文学における模倣という行為の多面的な魅力について指摘してゆきたい。

# 『太平記』「楊国忠事」段所引の『白氏文集』 本文の系統と考察

明治大学専任助手 カネ キ トシノリ  
金木 利憲

漢籍が日本文学に多大な影響を与えていることは、程度の差はあれ疑うことはできない。発表者はこれまで日本文学作品に引用される『白氏文集』について、テキスト校勘学の立場から検討を行ってきた。『白氏文集』は日本で読まれた漢籍の中でも代表的なものであり、時代を超えて影響を与えている。そのテキストは本文と編成に着目して旧鈔本系・刊本系に分類され、鎌倉時代までの日本文学作品には旧鈔本の、江戸時代は刊本系の本文が引用されるという傾向があることが解明されている。

室町時代は、日本文学作品において引用される『白氏文集』本文が、旧鈔本系から刊本系に交代していく時期だと考えられる。『太平記』は、室町前期に成立し、まず写本として流布した。江戸初期、慶長年間に刊本が出版されるに及んで流布本としてテキストが固定されたが、それまでは写本ごとに異なるといってもよい程流動している。とすれば、流動過程の中に、引用される『白氏文集』本文の変化が遺されてはいないだろうか。

筆者は既に、予備調査として「楊国忠事」段に現れる「長恨歌」の一部についての検討を行い、私見を発表している（『『太平記』に見る『白氏文集』本文の交代——旧鈔本から版本へ』『アジア遊学』Vol.140（勉誠出版 2011年04月））。この際『太平記』テキストによって引用文に差異が見受けられた。これは従来重視されてこなかったことであるが、旧鈔本系・刊本系の別のみならず、引用句数の長短、『太平記』テキストの系統や成立年代に関する問題にまで踏み込んで検討可能だと感じさせるものであった。

本発表では、研究の嚆矢として、予備調査で得られた知見を基に「楊国忠事」段を更に深く掘り下げ、より広範囲の『太平記』テキストと比較することにより、日本文学における『白氏文集』受容一例を解明する。



# 平安朝女流文学における蛍の心象表現

—恋心の働きと魂について—

台湾大学修士課程 ゲン 巖 シユケツ 守潔

蛍は光る虫として、古くから人々に好まれ、『伊勢物語』四十五段では、飛び上がる蛍が愛しい亡き人の魂に例えられている。『源氏物語』蛍巻の、光源氏が蛍を部屋に放ち、養女の玉鬘の容貌を一瞬の蛍火によって照らし出して見せる場面は有名である。随筆の名作『枕草子』では「虫は」という段があり、蛍も言及された。和泉式部の和歌に、男に忘れられた女性が物思いにふけるうちに、蛍が自分の身体から飛び出す魂のように見える場面がある。蛍はしばしば夏や秋の風物として詠まれるほかに、和歌や物語、随筆の中に恋に関する描写が少なくない。俞玉姫氏（2002）は、男の漢文世界には、中国の好んだ花鳥のほうへ傾ける傾向があるのに対し、「政治から自由であった王朝女流文学の作家たちは草や土に生存している虫にも観察する余裕がいっそうある」と述べている。女流文学に見られる虫の様態が多様であるからだろう。

このように蛍と恋心との結びつきについて、周知のように古今集時代の和歌と閨怨詩の間には密接な関係がある。また、『伊勢物語』四十五段や、和泉式部の歌のように、蛍を「遊離魂」の形として取り上げている。野村精一氏は、『和泉式部集』で遊離魂の信仰が古代において日常的であったと注釈した。蛍について初めて文字として記されているのは、『日本書紀』卷第二神代下の「然彼地多有蛍火光神及蠅声邪神」という一文であり、蛍火を妖しく光る神に例えるが、その精霊性を持つ蛍は遊離魂との関連性があるのではないかと。しかし管見の限り、閨怨詩における蛍は「魂」や「精霊性」のあるものとして見るという象徴が少ないようである。遊離魂のイメージは平安時代になるといか

なる特色を持つのか。本稿では日中の「螢」の心象表現を比較し、螢における恋心を描写する歌や場面を取り上げ、古来の「遊離魂」の信仰とのかかわりを考える上で、平安朝の女性はどのように螢を見ていたのかを探ってみたい。

## 日韓関係における『胡砂吹く風』の価値

中央大学大学院博士課程 劉 <sup>ユ</sup> <sup>ワンキョン</sup> 銀 旻

『胡砂吹く風』は明治24年10月2日から150回に亘って『東京朝日新聞』に連載された小説で作者は対馬出身の半井桃水。かつて朝鮮の倭館で幼年期を過ごした経験がある。桃水は小説家としてより樋口一葉の小説の師としてよく知られているが、それは樋口一葉の研究に関わる人に限るだろう。

『胡砂吹く風』は日本人と朝鮮人の混血児、林正元が朝鮮を背景に活躍する物語である。桃水がこのような小説を書いた意図は、「日本は父の国朝鮮は母の国、母の国に生れ父の国に育ちし正元恩に愛に固より厚薄の別あることなく父母両国共に栄え行かんこそ宿年の望なれ」（『東京朝日新聞』明治25年1月27日）という文章から窺うことができる。

桃水は、日本人ではあるが「対馬人」としての立場から偏見を持たずに朝鮮を見ることができた。また新聞記者として変わっていく世界情勢の流れもある程度知っていた。朝鮮が鎖国を主張し、他国を排斥すると西洋の勢力に飲まれてしまうという恐れも持っていた。だからこそ両国の血が流れる『胡砂吹く風』の主人公林正元が生れることができ、このような視線で書かれた事にこの作品の価値があるのではないだろうか。

当時の新聞小説としては珍しいほど長く連載された本作品は、日本人が書いた本格的韓国小説の最初の作品だと言っても過言ではないはずである。しかし、『胡砂吹く風』は韓国関連の書物としてもあまり扱われていない。日韓関係を扱った小説としての位置付けはもちろんのことだが、その文学的価値も改めて問う必要がある。前述したように桃水は樋口一葉の小説の師ではあるが、一方

では一葉の文学的素質から刺激を受けたとも見ることができる。彼の初期の小説と、一葉と会って半年後に書かれた『胡砂吹く風』を比べることでその変化が明らかになるであろう。かつて日韓の友好的関係を望んだ上で書かれた『胡砂吹く風』についてその執筆より一世紀以上も過ぎた今、両国の関係を改めるためにも検討すべきではないだろうか。

## ポスターセッション題目

大江健三郎『治療塔』における死と再生

—「3.11」という“未来の経験”—

ナム フィジョン  
南 徽貞（東京外国語大学大学院博士課程）

長谷川如是閑にみる「笑い」

—戯曲『大臣候補』を中心に—

オダゴリ リサ  
小田切 璃紗（東洋大学大学院博士課程）

『諸艶大鑑』における世伝の人物造型についての検討

—世伝は色道の「二代目」たり得るか—

ミズカミ ユウスケ  
水上 雄亮（武蔵高等学校中学校専任教諭）

井上靖シルクロード詩集における言語指向

—素朴的、始源的、直接的な指向をめぐって—

コ イリョウ  
顧 偉良（弘前学院大学教授）

日本文化の精神性と枳形本についての一考察

—『おくのほそ道』の造本を出発点として—

ニシ イオリ  
西 いおり（京都産業大学益川塾研究員）